

課題を克服しスリーサイト方式で豚を肥育

地域の農家と耕畜連携にも取り組む

有限会社 柴畜産
(千葉県旭市)
代表取締役
柴香代子さん

疾病対策のため農場を三つに分散

銚子市猿田町の細い道をずんずん上って行った先はどん詰まりで、そこには建物は何棟もあり、サイロ風の建築物もいくつか並んでいる。ずいぶん大きな養豚施設なのだと感心していたら「ここは肥育農場で、出荷前の豚と、一部ですが、生まれたばかりの子豚がいます。他の場所に、繁殖農場と離乳農場があり、成長段階によるスリーサイト方式で一貫生産しています」と、有限会社柴畜産の代表取締役、柴香代子さん（51歳）。

そもそも養豚の仕組みとは？

「ストールが並ぶ交配舎に母豚がいます。週1回、人工授精で種付けをして114日後に出産のため分娩舎に移動させます」

1頭の母豚から生まれる子豚は12頭から15頭。40頭の母豚を1グループとして種付けするので、毎週500頭ほどの子豚たちが次々生まれていることになる。

1カ月弱で、子豚たちは、母豚と別れて離乳舎へ移される。1・5^日だった子豚は8^日まで育っており、離乳舎でさらに35^日ほどに成長。ぐんぐん大きくなって「1カ月半ほどで、この肥育舎へ来ます。4カ月ほどストレスが少ない環境と徹底した健康管理のなかで過ごして出荷します。生まれてからおおよそ6カ月で、体重は120^{kg}くらいになります」と香代子さん。

肥育舎を、なぜ、わざわざ離れた土地に建

設しているのだろうか？

「豚は病気になりやすい動物なので、疾病対策です。どん詰まりに豚舎を建てるのも、交通量が少ないからです。病原菌は人が運んできますから」

3代目社長、経営の立て直しに奮闘

香代子さんは3代目社長だ。豚の仲買を

していた父が養豚に移行して、母豚200頭からスタートしたのが、この猿田町だった。その父は、香代子さんが19歳の時に逝去。母と姉が会社を継続していた。姉の結婚を機に、東京の広告代理店を退職し、引き継ぐことを決意。ところが猿田町に戻って来たものの、職人肌の母とは意見が合わずなかなか経営がうまくいかない。一から学び直そうと、日本有数の畜産会社へ研修に。2年

半後、戻ってみると、豚舎は荒れ放題、来月支払う資金もない状態だった。
「不安で夜な夜な泣いていたのですが、とにかくコストカットしなくちゃと——」
人工授精の精液の配送の回数を削減すれば受胎率が下がるし、病気の豚の薬をカットすればもっと具合が悪くなったり——。
「一番大事なところはカットしちゃうじゃないと、やってみてわかったんです」
香代子さんは、重圧に押しつぶされそうになっていたのだ。

さらに、飼料の買掛金を数カ月分滞納していたことが判明。すぐに飼料メーカーと交渉し、融資を受けて買掛金を一気に返済した。

「交渉は胃に穴が開くほどきついことでしたけれど、値下げが可能となって、ようやく翌年から経営が上向きました」

不屈の精神で事業拡大

それで終わらないのが香代子さんだ。

10年後には会社を拡大するプランを立ち上げたのだ。図らずも地続きの土地の購入が可能となり、肥育舎を新設。そのうえ、自社の配合飼料工場を造ることを英断した。

「当時は、原料がとても安くて、配合飼料メーカーより安くできたんです」

トウモロコシ、大豆かす、ビタミン、ミネラル、カルシウムなど豚の成長段階に合わせた配合設計が可能となった。100%自



P17: 新設の肥育舎を見回る香代子さん。香代子さんが手を出すと、豚たちが競って寄ってくる。出荷時には、1頭ずつ体重を測定する
P18: 分娩舎で、生後1週間の赤ちゃん豚たち。一生懸命、母豚の乳頭にかじりつく。1頭の母豚から12頭ほど生まれる(上段左) ボタン一つで新鮮な飼料を作る自家配合飼料工場(上段右) 外国人社員を含め総勢27人のスタッフが従事。人材育成にも力を注いでいる(中段) 広告代理店の出身なだけに、発想が柔軟で決断力が早い香代子さん(下段)





肥育舎の床はすのこ風で、溝に落ちたふんや尿は、分別して処理設備へと運ばれる(上) 全自動で攪拌して堆肥化する密閉型の発酵槽(右下) 長時間かけてさらさらした堆肥になる(左下)

家製、出来たてだ。

出荷前の豚には、10%ほど飼料用米も入れている。千葉県は米農家も多く、2024年から飼料用米300トの割り当てがある。食いつきに変わりはないが、肉質に違いが出て「脂みが多少白く、肉もピンク色になって、きれいに見えます」と香代子さん。

「最初のころ、自家配合つて皆失敗する」と聞いていたのに、同じ道をたどりました」

微粉碎したトウモロコシを与えると、胃の吸収がよくなりすぐ大きくなる。「気をつけなさいと散々言われていたのに、よく食べてくれるから楽しくなっちゃって、つい、あげ過ぎたんです」

豚たちの胃が動かなくなって胃潰瘍にな

り、たくさん死なせてしまったのだ。

一難去ってまた一難の連続だったが、念願のスリーサイトの用地確保にも、香代子さんなりの突破口をみつけ出しては切り開いていった。この2年間で既存地を含めて、3カ所の農場を新設。母豚800頭に規模を拡大したのだ。「ようやく昨年からは順調に回るようになりました」と笑顔を向けた。

素晴らしい。苦しくとも逃げなかった精神力は大したものだ。

「私、中学生の時陸上部で三種競技をやっていたんです。一年363日くらい、スパルタでしごかれて『ネバーギブアップ』『努力は無限』とか洗脳されて——。当時の苦しさに比べたら、大したことはない」と自分に言い聞かせて乗り越えられました」

堆肥を地域の農家へ

分娩舎では、大きな母豚のお乳を必死で求めて乳頭に吸い付く赤ちゃん豚たちがいた。かわいい。生後一週間の子豚たちだ。

「生まれた直後から母乳を求めます。自分のおっぱいの場所は決まっています。母豚には16ほど乳頭があるんだと思います」

母豚はかなり大きい。オランダの「Topigs20」という品種だ。獣医の助言で思い切って切り替えたそうで、250^{ポンド}ほどあるという。

「たくさん生むだけでなく、温厚な性格ですし、能力も優秀なんです」

別棟の肥育舎に行くと、出荷を控えた約1000頭の豚たちがいた。

「おおよそ同じ母豚から生まれたきょうだいたちが同じケージに入っています」。豚たちは、ほどよく肥えて、なかなか愛嬌がいい。豚舎は、センサーによってカーテンやファンを制御。心地よい環境が保たれる。

床には溝があり、ふん尿はすのこ風の床から落ちる仕組みなので、汚れていない。これだけの養豚場では、ふん尿の処理は大変だろう。「すごい量です」と香代子さん。

ふん尿は自動的に分別されて、尿は大きな浄化槽で処理される。ふんは、密閉型の全自動発酵槽と、縦型スクリーンによって定期的に攪拌し堆肥化する二つの方式を使っているのだとか。堆肥場でうず高く積み重なっているのは、ふんがさらさらした土のようになった堆肥で臭いはしない。

「堆肥をもらっていただけの農家さんを探しているのですが、県内は畜産業が盛んなので、なかなか厳しいんです」

堆肥が足りない地域とのマッチングがうまくいかないそうで、輸出も考えたが基準は厳しい。あれやこれやと言いつつも、香代子さんは、次の手を考え始めている。

「ハウス農家さんから、袋詰めが欲しいと言われたんです。うちの堆肥、いい出来なので」と、バケージのデザインを始めた。

「私、打たれ強いんです。何を言われても無になれるので。後は営業です」

(片柳草生／文 鈴木一彦／撮影)